一八六七年のパリ万国博覧会への日本出品と展示——その経緯と実態

森　仁史

今年は日本が政府として初めて参加したパリ万博から数えて一五〇年にあたる。パリ日本文化会館では、これを記念して展覧会が計画され、テキストを求められたが、これはフラス語でしか発表されない。四半世紀も前にこのことについては調査結果を発表したのだが、改めて気が付いたことも幾つかあるので、前言訂正の一文をご披露したい。

＊　＊　＊

一八六七年二月十三日（グレゴリオ暦、以下同じ）徳川昭武は将軍慶喜の名代として、万国博覧会出席と条約締結国巡歴のため、外国奉行ほかの部下およそ三十名とともに横浜港よりフランス郵船アルフェー号でフランスに向けて出港した。幕府の要請に応えて出品物を集めた浅草の商人清水卯三郎も同じ船に乗っていた。これに先駆けて、一月十九日開成所の田中芳男や清水配下の商人、職人と清水の雇った芸妓ら十三名が幕府出品物とともに品川沖からフランスに向けて出港し、三月二十四日にパリに到着した。徳川昭武一行はスエズ運河を経由して四月十一日パリに到着し、二十八日にナポレオン三世に謁見し、国書を提出した。

徳川幕府の万博出品は駐日フランス公使レオン・ロッシュからの一八六五年八月十五日付け書簡によって伝えられたフランス政府の要請に応えたものであった。二十二日には老中、若年寄から出品する意向を返答している。前年七月から十二月まで長州征伐が続いた。この年一月にはすでに横須賀製鉄所が着工の運びとなり、幕府開明派による近代化は本格的に緒に就いていた。この事業を全面的に支援したのがロッシュであった。九月にこの準備のため外国奉行柴田剛中がパリに派遣され、機器の購入と三十名を超える外国人技師、職工の採用を進めていた。翌年六月から再び長州征伐が始まり、この最中七月二十日に将軍徳川家茂が死去し、十二月に慶喜が将軍を継いだ。慶喜はロッシュの建議に基づいて改革を推進し、一八六六年三月からフランス人軍事顧問による陸軍教練を始めた。幕政運営を陸軍、海軍、会計、国内、外国の五局に専任老中を配置する内閣制度に近い指導体制へと大幅に改編した。これらは薩摩、長州の倒幕派への対抗策であった。このなかで、万博への日本出品の勧誘はフランス政府がイギリスに対抗してアジア地域での影響力拡大を狙った政治的意図が読み取れる。

徳川昭武は慶喜からすると水戸徳川家斉昭の異母弟であり、十六歳年下であった。一八六七年一月三日にヨーロッパ派遣が水戸家に下命され、同日昭武は御三家の清水徳川家を継いだ。慶喜はのちに「親藩のなかから器量のある者をえらび、欧州にやって知見を広めさせ、その者をわが嗣にしたい。思うに、民部太輔がそれにふさわしい人である。」（山川浩『京都守護職始末』二　平凡社、一九六六年）と語ったと伝えられており、昭武を自らの後継者とするために海外体験を積ませようとしたのだろう。つまり、将軍はその後の徳川政権が国際環境のなかで欧米諸国と対峙することを予測し、万博参加を海外で帝王学を学ぶ

実践の場としようと目論んだのだった。

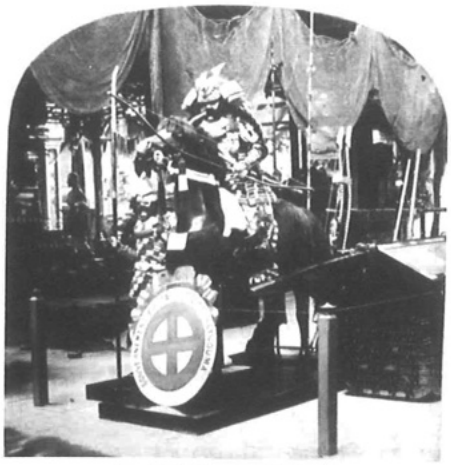
＊　＊　＊

幕府はロッシュの助言により一九六五年九月にフランス総領事にフリュリー・エラールを任命した。彼から一八六六年三月に詳細な出品依頼が江戸に届き、幕府は本格的な出品準備に着手する。これ以前二月に幕府は町奉行が選んだ商人に出品準備をさせようとしたが、選ばれた商人は辞退してしまっていた。全く未体験の博覧会事業であってみれば、具体的な指示なしには準備は進められなかったし、このため政府出品の比重は大きくならざるを得なかった。外国奉行翻訳係であった箕作秋坪を訪ねた浅草の商人清水卯三郎が箕作に勧められ、三月二十六日に出品を願い出たので、幕府は一万五千両を貸し与え、出品物収集を命じた。清水は武具、衣服、生活用品、画帖、浮世絵、書籍、金属・漆などの細工物からお茶、食料品まで二三四六点（およそ三万二千両）を集めた。これ以外にも、翌四月幕府は江戸市中の商人七名に骨董品を納入するよう命じ、彼らが集めた陶器、漆器、金工品、医療器具など諸職道具といった古美術品の代金は五月下旬には一万三八三一両に達した。

1　イタリア絵画展示室の日本出品油絵の一部（フランス国立文書館蔵）

新規制作による出品準備も進められ、一八六六年三月から開成所物産学出役田中芳男に昆虫、植物標本作成が命じられ、年末には彼の万博派遣が決まった。同所に五月末油絵出品が命ぜられ、十一月までに十点の油絵が完成、納入された〔図1〕。画題に日本の伝統行事や逸話が多いのはフランス側の示唆によるものだろうか。ほかに絵画作品としては、一面が縦六寸余横一尺八寸余という日本女性、名所、年中行事を主題とし、各五十枚の浮世絵画帳三帖と縦三寸余横一尺一寸余の花画帳二帖の制作が五月十五日御細工所に命じられた。前者には市中の浮世絵師芳年、貞秀、国貞ら十名が動員され、十月初旬に始めの二帖だけが納品された。後者は狩野勝川院と文人画家が描いた草花の写生画帖二帖が納入された。狩野勝川院はこのほか十月に六曲屏風三双、翌年三月に三幅対三点、大横物三点をも納入している他に画譜等も大量に出品された。

もう一つ開成所が出品準備にかかわったのが騎馬武者人形であった。来日したフランス人商人シュベリオンと七月二日詳細な出品打ち合わせを行ったなかで、彼は張子の馬と武器をもった人形の出品を勧めた。彼はそのほかに、陶磁器はもっと大きなものにすべきであり、紙は製造方法の分かるように、金銀製品が少ないので増やすように、などと事細かに助言した。彼の勧めに従って制作された実物の甲冑をまとった人形は重量が重くなったため、馬は



2　甲冑騎馬と従者人形

張子から木製に変更され、八月に納入された〔図2〕。絵画的な作品として、シュベリオンに目立つものをと要望され、向島花見を描いた縦六尺横九尺の押絵も制作した。

一九六六年五月十九日に幕府は再び町奉行を通じ、博覧会主意と規則書を広く伝え、大名、百姓町人まで資格を問わず出品を募った。この呼びかけに対し、ようやく八月薩摩藩が、十二月に佐賀藩が出品を申し入れた。薩摩藩は砂糖、泡盛、織物、漆器、陶器、籐・竹細工、農具などを、佐賀藩は有田焼、薬品、徳利のほか海産物、織物などを集めた。

清水は展示物以外に柳橋の芸妓三名をパリに連れて行くことを考えついた。清水はこのほか、五名の手代を伴っていた。このうち善八は建築の心得があった。こうして表1のような日本出品がパリに送られたのであった。箱は船積みされた時の数量であり、大きさは不明である。従って出品点数を正確に反映するものではない。幕府の荷には前述の騎馬なども含まれていたので、大きな箱もあったであろうが、佐賀、薩摩藩の出品は日用品が多かったのでさほど大きくはなかったことが想像される。

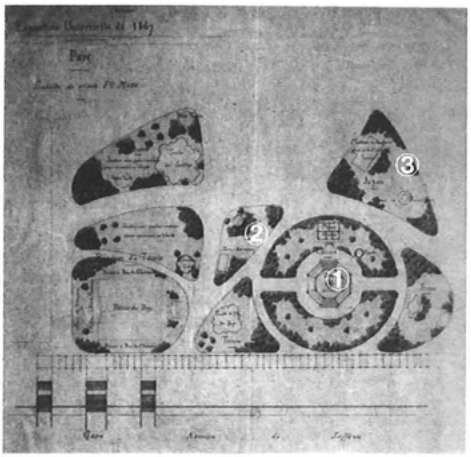
表1　『徳川昭武滞欧記録』第二　P. 335-342, 369-375, 377-378, 504-517

区分	箱	内訳	出航
政府出品	187＋釣鐘1、舟2	6681点	1867年1月
商人出品	157	146種	
佐賀藩	516	66243点	1866年9月
薩摩藩	219	122種	

＊　＊　＊

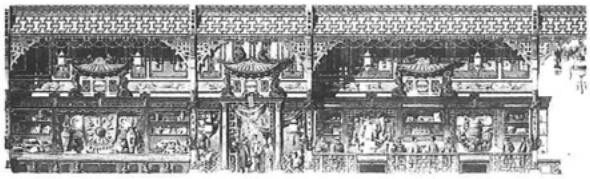
一八六五年十一月十六日スエズ運河会社設計技師だったアルフェ・シャポンにアジア・アフリカのパヴィリオンと会場中央に新たに建設される産業宮内のギャラリーの設計が委嘱された。現在フランス国立図書館版画写真室にはその設計図が残されている。シャポンのギャラリー設計案〔図3〕は破風や軒飾り、勾欄の形式がすべて中国風であり、当時のフランス建築家のアジア認識が反映されている。日本パヴィリオンも、他の国と同様に事前にフランス側で用意しようとしたと思われる。十一月にパリ滞在中の柴田にフランス政府から万博会場図面が手渡されたのはこうした会場準備を経たものだったと思われ、この頃までに日本ほか各国のパヴィリオンの配置〔図4〕も固まっていたと推測できる（①中国・③日本）。

開会後の『ルモンドイラストレ』は八月三十一日評判をよんだ芸妓のパフォーマンス〔図5〕を



4　パヴィリオン配置図
（フランス国立図書館版画写真室蔵）

5　日本人芸妓のパフォーマンス
（『ルモンドイラストレ』）


3　シャポン《日本ギャラリー》（フランス国立図書館版画写真室蔵）

取り上げた。同紙はこれを「薩摩公の家」としたが、九月二十八日に清水と其配下の手になるものだったと訂正した。清水の出品目録には「水茶屋」があるので、現地で組み立てた可能性があり、画面右方に見える農夫は同じく清水の運んだ「人形」だと推測できる。『一八六七年万博絵入新聞』七月十三日号にポール・ベレは日本パヴィリオンについて次のように記している。

…三人の日本の美女、江戸の本物の三人の娘、おさと、おすみ、おかねがいる。…若い女性はお喋りをしたり、羽根つきで遊んだり、阿片の煙草を吸ったりして時を過ごしている。…この近くに二軒目の日本の農家がある。一人の日本人がその地方の習慣であるティー・サロンの準備をしている。日本の茶碗でそれを売るのだが、郷土的な色合いと趣味である。

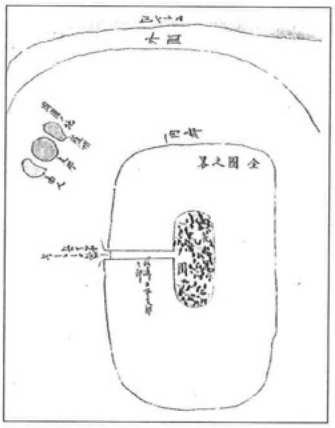
農家のそばの農夫が作業道具を片付けるような小さな小屋に日本の労働階級にありふれた服装をしたいくつかの人形が集められている。それらの人形はとても精巧である。…人々は一見しては人間と陶製人形を完全に見分けることができない

ベレが目撃した人形は幕末日本で流行し、松本喜八郎を始め名人が登場した活人形だと思われ、写真にもぼんやりとそれらしい姿が認められる。これは胡粉で頭部を制作するものなのでベレは見間違えたnであろう。屋根の形状から写真6の建物（後述）と考えられる。

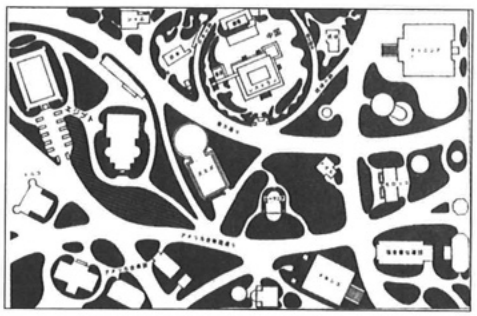
実際に建てられた日本のパヴィリオンについては情報が乏しいが、会場を実地に見聞した向山一履が報告〔図6〕で産業宮の外に、中国パヴィリオンを挟んで薩州、商人の二棟の日本パヴィリオンを記した証言は当事者ゆえにもっとも信憑性が高いといえる。これはパヴィリオン竣工後に作成されたと思われる会場図〔図7〕の配置とも符合する。つまり、産業宮の中の展示はフランス側の用意したままだったが、パヴィリオンは当初の計画とは全く異なった建物二棟が建てられたことになる。

さらに、この博覧会はナポレオン三世の国内外への政治的デモンストレーションでもあったので、政府は誕生したばかりの新しい映像メディアであった写真によって数多くの記録を残したので、これが有力な手掛かりになる。琉球パヴィリオンと記入された一枚の写真〔図8〕が伝わっているが、シャポンの設計した中国風な様式とは明らかに異なり、材料は異なるものの日本建築らしい建物である。屋根の妻と庇とのプロポーション、濡れ縁とそれを支える礎石、沓脱石、障子の桟の間隔と腰板の比率などどこをとっても違和感のないデザインであり、日本人が設計施工したと考えたい。

一体、徳川昭武一行は派遣決定から一行人選までにほぼ一月程度しか準備期間がなかったため、また幕府として具体的な外交的使命を帯



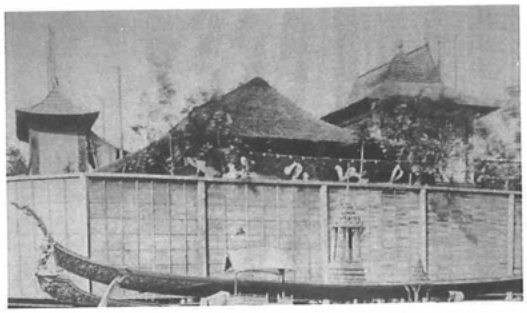
6　向山一履筆「日本展示略図」
（『続通信全覧』所収）



7　会場配置図の部分書起し
（原図はカルナヴァレ博物館蔵）

びていたわけではないので、その人員構成があいまいであった。主体は駐仏公使を命ぜられた向山一履以下の外国奉行系統九名、昭武傅役を命ぜられた山高信離以下身辺警護役の九名であった。展示の実務を担当できるのは一行のなかでは海外体験のある田辺や本草学の展示体験のある田中くらいであり、それ以外は清水卯三郎とその手代たちであったから、グランプリを授与された茶屋の制作者として名が挙げられている「大工藤五四郎」は清水の配下なのであろうと推察しておきたい。シャムのジャンクを写した写真〔図9〕に、琉球パヴィリオンとは異なる形式の屋根を覗かせている建物は商人パヴィリオンとすべきで、会場配置図〔図4〕にある日本パヴィリオンの場所にあたる。少し覗いている幔幕に「ちやみせ」の文字が見え、清水が運んだ水茶屋を組み立てたかと推測される。もう一棟が準備図面の動物公園の場所に建てられた琉球パヴィリオンと言うことになる。これらを総合すると表2のようになる。

8　琉球パヴィリオン（フランス公文書館蔵）



9　シャムのジャンク（部分）（フランス公文書館蔵）

表2

準備図面〔図4〕	向山報告〔図6〕	写真	会場図（カルナヴァレ博所蔵）〔図7〕		
動物公園	薩州	図8	琉球	図9	日本
日本	商人				

琉球パヴィリオンの写真に島津家家紋の入った円形の紋章が見えるのは倒幕に傾いていた島津藩が万博という国際舞台で日本の政治権力が徳川幕府だけではないことを示そうと意図したからだと思われる。柴田剛中のパリ滞在中に日本に興味を抱いていたシャルル・ド・モンブランがあまりに頻繁に柴田を訪ねたために、柴田が立腹して追い払ったことを遺恨に思い、モンブランは幕府に復讐の機会を狙っていたところにたまたま薩摩藩留学生と知り合い、その代理人として働くことになったとされる。幕府の準備の遅れのためか、博覧会出品目録には出品国としてJapon のほかPrincipaute de Satsouma（琉球公国）も登載されていた。しかし、この看板はJAPON の下にGovernment du taichiou de Satsouma と記され、明らかに公国から一歩踏み出して薩摩藩の政権としての立場を示そうとしたものであった。この主張は四月二十一日にモンブランも出席した万博事務局と日本出品者との会議の席上でモンブランが「太守政府」と表記したいという主張を見逃し、田辺ら幕府外国奉行が容認してしまったためだと考えられる。同一の紋章が前期の騎馬武者人形に置かれた写真〔図2〕も残されており、耳目を引く出品物を薩摩藩出品であるかの如く装おうとするこの政治的マヌーヴァはヨーロッパ人の発想になるものではないか。また、清水は薩摩藩一行の五代友厚や松木弘安と親交があったし、薩摩藩はベルギーへ商社設立準備のため五月頃にはパリを出発してしまうので、清水が琉球パヴィリオンをも自分の展示販売のために利用したかもしれない。

＊　＊　＊

エルネスト・シェノーは万博に展示された日本人の油絵を目にして、「この最初の試みはあわれむべき凡庸さをもっていて、画学生の作品に似ている事実を偽り隠すことはできない。」と評価し、だから「まだその固有の価値が完全に消失しない間に、この（＝日本の：引用者）美術のさまざまな実例を集積することができる」と述べているが、これはやがて来日するフェノロサと同様に、西洋美術に冒されない以前の日本美術にこそ日本の個性を見い出すべきだという狷介であり、未発達な美術を救済しようというヨーロッパの優越意識が露わになっている。

この時期のパリには、日本の出品物に芸妓のようなエクゾチズムからの興味を持つことはあったとしても、シェノーのように博物誌的に見ようしたり、あるいはジャポニザンのように日本の造型が持っている特質から新しい創造のヒントをつかもうとする者はこの時点ではごくわずかであった。例えば、日本への興味から一八六八年三月八日から徳川昭武の絵画教師となり、十月十五日使節一行がパリを出発する直前に照武の肖像画を描いたジェームズ・ティソや万博の日本出品に注目したクロード・モネなどは全くの少数派であった。

十一月三日の万博閉幕後、幕府はシュベリオンと売れ残った一〇一四件の日本出品物の販売契約を結んだ。油絵は売れ残ったが、『北斎漫画』や『北斎画譜』は売れてしまったのかこのリストには見いだせない。佐賀藩もようやく花瓶など百箱は売れたが、皿、茶わんなど四百箱余りは売れる見込みが立たなかった。日欧の生活習慣の違いからすればやむを得ない結果であり、ジャポニスム隆盛以前には当然の結果だっただろう。これが完売するのは一八七四年ウィーン万博開催の時点のことになる。

花森安治と名探偵

山田　俊幸

「花森安治」は、異能の編集者と呼ばれた人です。そしてまた、花森とは切っても切れない雑誌『暮しの手帖』は、絶後の編集を行った雑誌です。わたしたちは、先般上梓した『花森安治と「暮しの手帖」』（小学館）で、花森安治のそんな姿を多少映し出しました。そこで指摘したものは、「探偵目線」ということです。その「探偵目線」とは何でしょうか。そこで書き尽くせなかったことをここでいくつか書き記しておきましょう。

●探偵の成り方

大橋鎮子の書いたと思われる文章にこんな一節があります。

推理小説を読むようになったきっかけは、なんだったのでしょうか。イギリスでは、紳士の最高の暇つぶしだと、誰かがいっているのをきいて、いったいどんな読み物かしら、と、好奇心みたいなものでちょいとのぞいてみた、そんなことだったかもしれません。

そのひとが、〈幻の女〉というのを貸してくれました。作者はウイリアム・アイリッシュでした。どんな小説かしら、ときくと、推理小説の筋はあまりはっきり話してはいけない、と教えられました。まだ読まない人の興味をなくすからだそうです。

ちょっとのつもりで読みはじめたら、おもしろくて、つぎつぎに

一寸

第七十二号　二〇一七年十二月

第七十二号目次

新・旧刊案内72　青木　茂　1
『浅井忠全作品集』を読む（続）。『不燃都市』昭和二十年八月十五日発行本、『アイヌ絵志』など。
橋口五葉の大正二年（一九一三）秋の装幀自評　岩切信一郎　9
―『時事新報』連載から―
時に抗いし者たち――私の小菩薩峠（27）　大谷　芳久　18
大正・昭和戦前期中等学校の図画教員3　金子　一夫　44
北海道（3）
とろ火の写真　丹尾　安典　58
木口木版と宇田川玄真『西説医範提綱』メモ　森　登　67
銅・石版画遺聞68
一八六七年のパリ万国博覧会への日本出品と展示――その経緯と実態　森　仁史　75
花森安治と名探偵　山田　俊幸　80

新・旧刊案内72

『浅井忠全作品集』を読む（続）。『不燃都市』昭和二十年八月十五日発行本、『アイヌ絵志』など。

青木　茂

■東京美術倶楽部編刊の『浅井忠全作品集』についての書評を本誌に二、三回書いたら「あんな本に喰ってかかるなんて年甲斐もない」説と「もっと続けろ」説とが聞えてきた。僕の論は時に説明不足で不満を言われることがある。本意を知りたくば少しは勉強してほしいと思うが、いっぽう本来の趣旨は意を尽くして述べるべきだとも思う。いずれにしても年相応の思慮分別はありたいものだ。

この七月に西洋美術館で十六世紀後半の画家アルチンボルドの展覧会を見た。その図録を読むとジュゼッペ・アルチンボルド（以下G・Aとする）の作品のほか「G・Aに帰属」「G・A（?）」「G・Aの追随者」「G・Aにもとづくエッチング」などの作品がある。帰属はAttributed to G. A.である。アルチンボルドに工房作はなく、同じ系統の作家の作品は展示されていたが、もちろんにせものは無視されている。

こんな小さな図録でも西洋での厚い美術研究史が反映している。Attributed to……しても原意は「通例では誰それの作品とされている」ぐらいであろうが、日本では「誰それの作品に帰属される」と訳されているようだ。「帰属」は会社への帰属意識とか日本国財産に帰属するとかに使われる用語で日本語としては熟していない。誤訳のようでも